

特集

“Beyond Borders” と大学における教育の国際化

— 立命館大学の取り組み —

山井敏章

要旨

立命館学園の将来ビジョン「R2020」（2009年策定）には、“Creating a Future Beyond Borders”がモットーとして掲げられている。それは、さまざまな境界を超えて「人と人、人と自然が調和的につながる未来」を築こうという学園の意志を示すものである。立命館大学における国際化の取り組みも、こうした理念を基礎にして進められている。本稿では、私が2015年に国際部長に着任して以降、とくにSGU事業との関わりで、国際部を中心とする諸部課によって進められてきた教育の国際化推進に向けた取り組みを紹介する。“Beyond Borders”の理念を生かしつつこの課題にどう取り組んできたか、その試行錯誤のプロセスが描かれる。

キーワード

Beyond Borders、SGU（Top Global University Project）、英語教育改革、留学プログラム、Beyond Borders Plaza

はじめに

立命館大学における国際化推進の取り組みの全体像を示してほしい、というのが本誌の編集委員会からの依頼である¹⁾。私は2015年4月から現在²⁾まで国際部長の職にあり、本学の国際化戦略の中核組織であるグローバル・イニシアティブ推進本部の事務局長ともなっているので、役職上はまさに適任ということになるだろう。それに、本年度実施されるSGU（スーパーグローバル大学創成支援）事業の中間評価のための報告書（「中間評価調書」）を作成する過程で、本学でどのような取り組みがなされているか、一応のことはつかむことができたように思う。しかし、だからといって「全体像」を語ることに私にどこまで可能かという、本当のところそう自信はない。

上の中間評価調書は、所定の各項目についての原案を担当部課が作成し、それに私が手を加えてまとめた。その作業を進めるなかで思ったのは、私の知らない細かい努力が多方面でどれほどなされているか、ということである。アメリカン大学とのジョイント・ディグリーやオーストラリア国立大学とのデュアル・ディグリーなど、本学の国際化の「目玉」となるようなプロジェク

トの実現にはもちろんたいへんな労力が注がれているが、それだけでなく、もっとはるかに目立たず、しかしこれらに劣らぬ困難を抱えた無数の仕事が大学の国際化を支えている。そのすべてはおろか、およそのところでさえ自分が把握し理解しえているとは到底思えない。

中間評価調書をまとめながら思ったことのもう一つは、国際化推進のための取り組みの多く、あるいはほとんどすべてが試行錯誤と模索のなかで進められていることである。さまざまな制約条件が壁のように立ちはだかっている。そのなかですっきりした「正解」が見つかることなどほとんどない。問題は、つぎからつぎへと押し寄せてくる。戦略を立て、それに従って行動しようとはするものの、手探りになるのは初めから承知のこと。少なくとも私自身のスタンスはそういうものだった。そもそも、初めから正解の見えているような事業などこの世界にほとんどないし、あったとしても、そんな取り組みはあまり面白くはないだろう。むしろ、手探りのなかからこそ新しい可能性が生まれるのではあるまいか。

以下では、国際部長の職に就いてから2年半ほどの間に考えてきたこと、試行錯誤を重ねながら取り組んできたことを記そうと思う。国際部長という立場から、国際部の取り組みが中心になる。もとより国際部は大学全体の国際化を支える部局であり、また、SGU事業の目標達成を念頭においた全学的な取り組みにおいても、グローバル・イニシアティブ推進本部事務局長である私のいわば中核の実戦部隊として働いてきた。したがって、国際部の取り組みの検討を通じて本学の国際化推進のための取り組みのかなりの部分を示すことができると思うが、ただし抜け落ちるものも大きい。たとえば、上にもふれたアメリカン大学とのジョイント・ディグリーやオーストラリア国立大学とのデュアル・ディグリー、あるいはキャンパス・アジアやAIMSプログラム（ASEAN International Mobility for Students Programme）、RiSE I≡J Project（Ritsumeikan University Science and Engineering India-Japan Project）のような、海外の諸大学と連携したアクティブラーニング・プログラムなど、上の中間評価調書に「特筆すべき成果」としてあげた諸々の取り組みは、本稿の記述には含まれない。それらのひとつひとつにはそれぞれのストーリーがあり、そのすべてを描き出すことは私の能力を超える。また、研究の領域での国際化の取り組みも本稿の対象から外されている³⁾。以下で描くのは、こうした大きな限定つきの「全体像」である。

1. 国際化のビジョンと“Beyond Borders”

国際化推進の取り組みを進める上で、まず全体の方向性を示すビジョンを明確に定め、それに即して重点課題を設定し、その上で具体的な取り組みに進むべきだ、という意見が国際部を含む全学のあちこちの議論の場で聞かれた。正論と思うし、私自身もそうしたことを一応は意識しつつ作業を進めてきたつもりではある。しかし、実のところを言えば私は、そうしたことをあらためてしようとはあまり思わなかったし、今も思っていない。何より「ビジョン」については、本学は過去に十分議論を重ねてきている。

2009年5月、立命館大学を含む立命館学園全体の将来構想を定めるための議論が始まった。中期計画「R2020」（2011—2020年度）として結実することになる議論である。この議論は、まさに学園がめざすべき方向性を示すビジョンの検討から始まった。

ビジョン策定のために設置された委員会には、学園の各構成パートから送られた20名ほどの代表が集まった。私もその一人だった。学園と言っても大学と附属校、そして複数ある附属校の間、そして立命館大学と立命館アジア太平洋大学との間でもそれぞれに状況が違い、それに応じて思うところも異なる。そういう人間がこれだけの数集まって意見を述べ合い、そのなかから統一的な方向性を見いだすというのは、至難の業でしかありえない。議論は錯綜し、膠着した。学園全体が進むべき方向を端的に示すような「言葉」がほしい、という流れになったが、その言葉が見つからない。10月になり、最後は私を含む数人の委員が茨木駅近くのホテルに泊まり込んで議論した（立命館大学がこの茨木にキャンパスを開くことになろうとは、当時の私には思いもよらなかった）。その夜に生まれたのが“Beyond Borders”である。合宿後に開かれた委員会でこの言葉が紹介されたとき、これなら行ける、という空気が場に流れた感覚を覚えている。“Beyond Borders”を全体の方向性を示すモットーとした上で、学園が取り組むべき主要な課題をその下に並べたビジョンが策定された。

“Beyond Borders”（その後の議論のなかで、最終的には“Creating a Future Beyond Borders”となった）という言葉に託したメッセージはつぎのようなものであった。出発点は、第二次大戦後の立命館大学の再興を担った末川博総長による「未来を信じ、未来に生きる」という言葉にある（私はこの言葉を、立命館がもつ最大の財産だと常々思っている）。それなら、どんな「未来」に生きたいとわれわれは思うのか。「人と人、人と自然が調和的につながる未来」。委員会での議論を重ねるなかで浮かんできた答えはこういうものだった。国や地域、キャンパスの壁を越え、宗教や文化の壁を越え、そして何より自分自身のうちにある壁を越えてそうした未来を築く。これが“Beyond Borders”に託されたメッセージである。

“Beyond Borders”に「自分を越える、未来をつくる」という日本語が付され、学園内、そして学園の外にも向けられた立命館のキャッチフレーズとして多用され、その際「越える」という要素ばかりが強調されるように思えたとき、私は幾ばくかの懸念を覚えた。Borderを越えるだけなら「侵略」もまた“Beyond Borders”である。どんな「未来」に生きたいのか、という出発点の問いを忘れてはならない。

ところで、上にも記したように、越えるべきBorderは国境ばかりではない。国内のどこかの地域に出て行って何か活動をする、あるいはキャンパス内でも、さまざまな壁を越えて活動することはできるだろう。そもそも大学の核心におかれるべき学問に意味があるとすれば、それは学ぶ者の内奥に「変革」をもたらすことによるしかありえず——中世史家・阿部謹也氏が師である上原専祿氏の言として紹介する言葉、「解るということはそれによって自分が変わることでしょーう」（阿部1988: 17）という言葉は私は想起する——、だからそれは「壁を越える」行為である。「職業に貴賤はない」という言葉にかけて言えば、「越えるべきBorderに貴賤はない」。だから、「国際化」ばかりに改革の方向を集中するべきではない、と私は思う。

ただし、さまざまなBordersのうち、国の壁を越えることが、とくに日本人にとってはとりわけ重要な意味をもつとも私は思う。国連高等難民弁務官を務めた緒方貞子氏は、「学生に限らず、日本社会全体が、亀が甲羅に引っ込むように、居心地のいい同質的な場に閉じこもってほしいと思っているように見受けられる」、と日本社会の現状に対する危惧を表明している。そして、「創造性とか社会革新の力はいずれも多様性の中からは生まれようがない」のだ、とも（野林・納

家 2015: 297, 299)。国際化の推進はやはり重要な課題である。それに、学生を海外に連れて行ったとき、多くの学生が明らかに変わるという実感を多くの教職員は持っている。単なる理屈や外からの要請ではなく、そうした実感があるから、教育の国際化推進に力を注ごうと思うのである。

2. “Beyond Borders” と SGU 構想

現在の立命館大学による国際化推進の取り組みが、SGU 事業への申請書（「構想調書」）に掲げた諸目標の達成を中心的な課題として進められていることは否定すべくもない。私自身は構想調書の策定には関わっておらず、正直なところ、その内容を自分のものとするのにためらいを覚えるところも少なくない。ただし、そのこととは別に、構想調書で打ち出している全体的方向性は、前節で述べた“Beyond Borders”と矛盾せず、そこに込められたメッセージのうちに位置づけようと私は思っている。

本学の SGU 構想のキーワードは「アジア」であり、構想調書には、「グローバル・アジア・コミュニティに貢献する多文化協働人材の育成」、「アジア・リテラシー概念の探求」などの言葉が並んでいる。ヨーロッパを中心に築かれてきた近代文明が限界を迎え、それに代わりそれを乗り越えるアジアの価値が重要だというような、一時よく聞かれた認識に私は容易に同意することはできないのだが——自由主義や民主主義のような「西洋産」の価値が今のアジア諸国でどれほど脅かされているかを考えてみるとよい——、アジアと呼ばれる地域に生きる人間として、アジアを自己の思考の重要な一部に据えることは自然であり、重要であるとも思う。

SGU の中間評価調書で私は、本学の構想全体のメッセージをつぎのように書き換えてみた。すなわち、「アジア・コミュニティの一員として、持続可能な世界の構築に貢献しうる人間を育てるための教学システムの構築と実践、同じく持続可能な世界の構築に貢献しうる知の拠点の形成」。また、「アジア・リテラシー」なる——学内でも批判的な声がしばしば聞かれた——概念については、「アジア社会の一員としてものを考え、アジアの文化的多様性を意識しつつ、アジア、そして世界が抱えるさまざまな問題を的確に捉え、その解決に向けて行動するための素養、力」という定義を私なりに与えておいた⁴⁾。こういうものであれば、本学が進むべき方向性を示すものとして大方の同意を得られるのではあるまいか。

中間評価調書で私はまた、“Beyond Borders”に託した「人と人、人と自然が調和的につながる未来を築く」という思いが、「アジア・コミュニティの一員として、持続可能な世界の構築に貢献する」という SGU 構想の根底の目標に連なっている、と記し、さらに、「この思い・根底の目標を土台にしてたくさんの枝葉が生い繁る樹木が成長する、というのが本構想全体のイメージである」と述べておいた。SGU 事業申請時の構想調書には、緑の葉の生い繁った巨木の図が示されているが、これにこと寄せて私自身の考えを入れ込んだものである。枝葉が繁れば繁るほど全体は見えにくくなる。剪定も必要だろう。しかし、むやみに剪定して樹木の自然な成長を損ねてはいけない。上の文に記した根となる「土台」を折々に確認しつつ、しかし枝葉の繁る力を損なわず、それを生かすことこそが大切だと思う。手探りの中からこそ新しい可能性が生まれる、という本稿の「はじめに」に記した言葉をここで繰り返しておきたい。

3. 学生海外派遣・留学生獲得のトライアングル

私自身の「手探り」は、取り組むべき課題を見えるようにすることから始まった。SGU 構想調書は 80 ページに種々の内容がびっしりと書き込まれたもので、正直なところ、全体を読み通すだけでも容易でない。目標とされる課題がたくさんつめこまれており、どこから手をつければよいのか分からない。2015 年 4 月に国際部長の任に就いてから 2 ヶ月余りが経ち、6 月に入ってようやく、構想調書の内容を自分なりに咀嚼して見取り図にまとめることができた。それが、図 1、2 の「トライアングル」図である。ただし、たんに構想調書の内容を見取り図化しただけでなく、国際部をはじめとする関連部課の教職員との議論・対話のなかで生まれたアイデアがいくつも、そこに組み込まれている。だから、この図は私を含む何人もの教職員の合作である。

それぞれの図は、日本人学生の海外派遣増（1,555 人→3,200 人）と受け入れ留学生数増（2,242 人→4,200 人）という SGU 構想の二つの目標に即してつくられている。この二つをとりあげたのは、それが社会的に最も注目される（見えやすい）数値であることに加え、この目標を軸に据えると、国際化推進に向けた他の様々な取り組みがつながりをもって見えて来るという感触による。

図が示す内容を簡単に説明しておこう。各図には、それぞれの目標の実現にとってとりわけ重要と思われる方策を三つの円に分けて示してある。たとえば日本人学生の海外派遣増については、学生の英語力向上に向けた方策として「英語授業改革」と「英語による授業」があげてある。前者は語学授業の改革であり、後者は、英語で実施される専門科目等の授業である。「英語授業改革」の円に向かう矢印で示してある「プロジェクト発信型英語プログラム」とは、英語教育の新たな手法であり、元慶應義塾大学教授で、その後本学生命科学部教授となった鈴木佑治氏の考案によるものである。本学では、2008 年に開設された生命科学部・薬学部を皮切りに、2010 年開設のスポーツ健康科学部、そして、2016 年開設の総合心理学部で導入されている。学生が自身で選んだテーマについて発表、ディベート、パネル・ディスカッション、ポスターセッションなどを行う“Projects”と、英語の基礎的スキルを習得する“Skill Workshops”の 2 本の柱からなり、後者は学外の語学教育機関と連携して実施している。図の当該箇所の円内に「スキルベース科目の全学共通化」と記されているのは、この“Skill Workshops”のような形態を全学的に導入しては、という問題提起を含んでいる。

プロジェクト発信型英語は、「古典的」な英語教育のみを受けてきた私などにはたいへん魅力的に映るが、ただし、学生の英語力向上にとっての効果については、学内でもなお意見が分かれるようである。英語に限らず、いかなる教育方法にも問題はあり、これがベストというものはないというのが、いつの間にか長くなった私自身の教育経験からする実感なのだが、ただし、絶えず改善を追求しなければ良いものも悪くなるというのも、同じく私自身の経験からする実感である。英語教育についてはこの間、教学部主導で各学部の英語教育の改革に向けた議論が進められ、一応の総括もなされたところであるが、正直なところ、未だ道半ばとの感を私は持っている。

さて、「派遣」トライアングル図には、上の「英語授業改革」と並んで「英語による授業」が左上の円にあげられ、さらにその隣の最後の円＝「Beyond Borders Plaza/Square」についても、「近大英語村」（近畿大学の国際交流施設）が矢印でつながられている。「留学生獲得」のトライ

アングルでも、右上の円には「英語コース拡充」（英語のみで学位取得が可能なプログラムの増設）があげられており、英語力の向上が要を成す問題として意識されているのが分かる。好むと好まざるとにかかわらず英語が今や世界の共通語化しており、国際化の推進にとり、学生の（教職員も）英語力向上が決定的に重要であることは否定すべくもない。にもかかわらず、この課題を前面に立てることについて、どうもおかしい、という感覚が、国際部の議論の中で強まっていった。

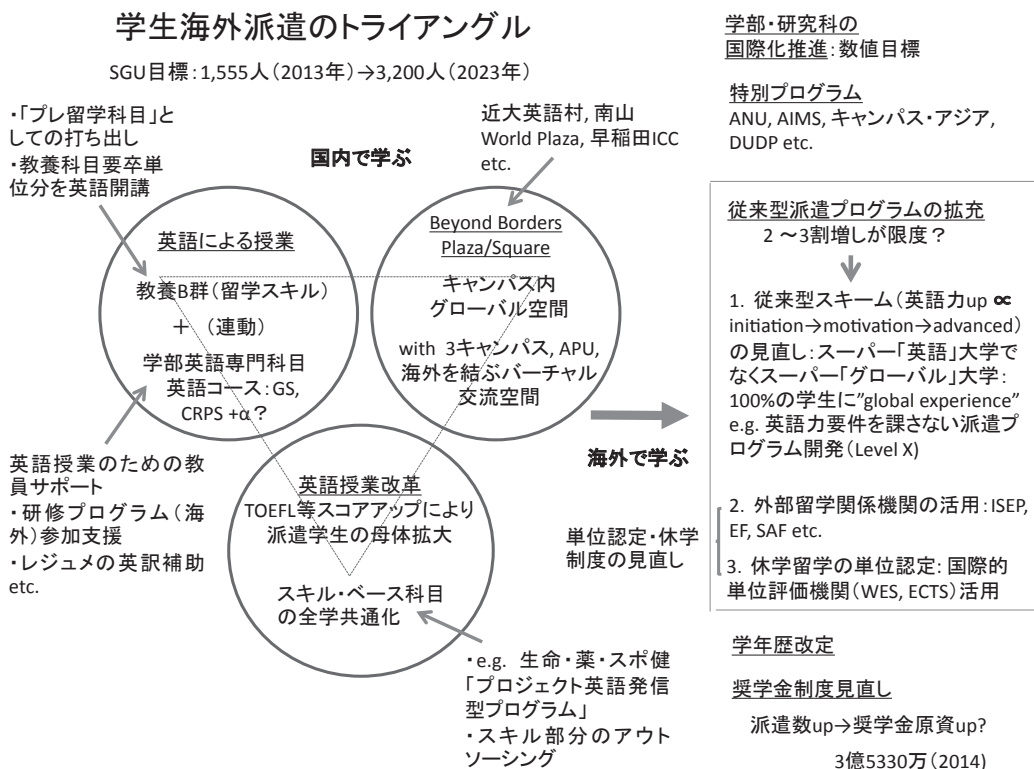


図1 学生海外派遣のトライアングル

留学生獲得のトライアングル

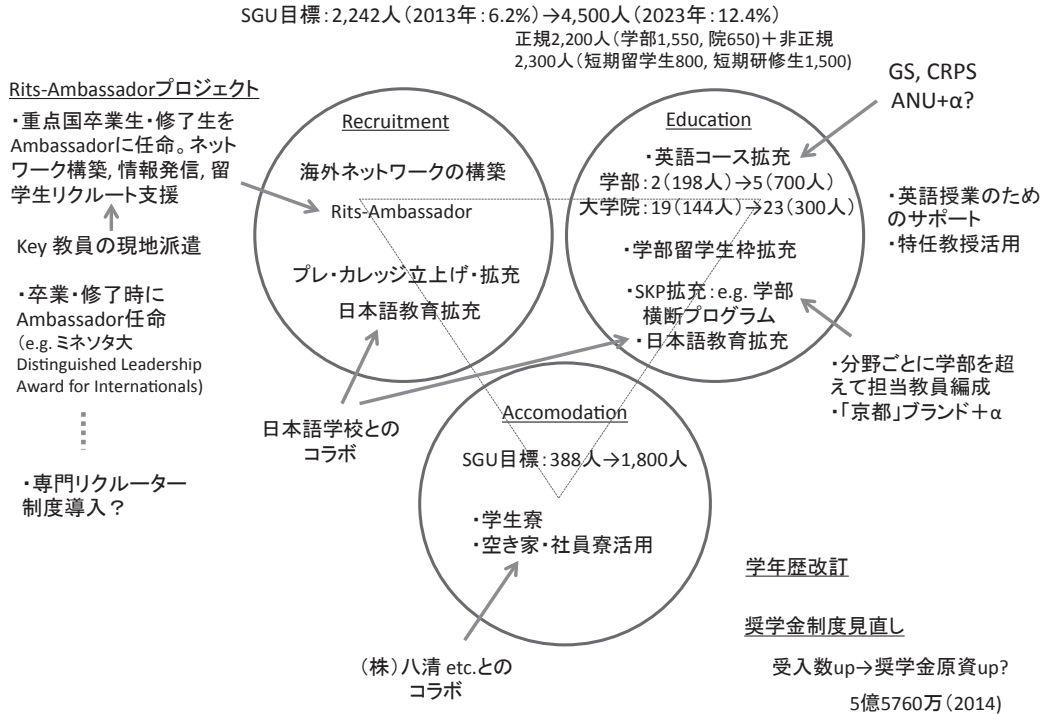


図2 留学生獲得のトライアングル

4. 「英語」と国際化：Global Fieldwork Project

「派遣」トライアングルの右横には、いくつかの項目が箇条書きで列挙してある。三つの円にまとめた方策は国内での学びに関わるもので、そこで力を高めた学生が海外に飛び出していくための方策を並べたものである。そのなかにある「スーパー『英語』大学でなくスーパー『グローバル』大学」という言葉に注目されたい。「スーパーグローバル大学」というのはもちろん、文科省によるSGU事業の名称である（“Super Global University”という英語は奇妙なので、同事業の英語による公式名称は“Top Global University Project”となっている）。このSGU事業では、指定されたさまざまな項目の数値目標を各大学が申請時に示すことになっているが、そのうち学生の語学レベルの向上、端的に言えば英語力の向上は——日本人学生の海外派遣数や受け入れ留学生数とならび——最も注目度の高いものと言ってよいだろう。立命館大学では、SGU事業終了時の2023年度に、全学部学生の5割、大学院生の8割がヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）のB1レベル（TOEFL-ITPでは487点以上）に到達していることを目標数値として掲げている。SGUに限らず、社会の多方面で英語力向上の必要性が叫ばれていることはあらためて指摘するまでもない。しかし、「英語ができなきゃ国際化しちやいけないのか」。

ベストセラーとなった2013年の書物、『里山資本主義』には、つぎのようなエピソードが紹介

されている。岡山市内から車で1時間半ほど、中国山地の山あいにある真庭町で、ある製材所が製材の過程で出る木屑を利用した発電施設をつくった。「木質バイオマス発電」という発電方式で、2,000世帯分の発電量をもつ。さらにこの木屑を直径6～8ミリ、長さ2センチほどに固めた木質ペレットをつくり、これを燃料とするごく簡単な構造の「エコストーブ」を開発した。加えてこの製材所は、新たな手法——板を縦横に貼り合わせる——による集成材を開発し、高層木造建築さえ可能な建材を生み出そうとしている。こうした試みは過疎の地に雇用機会を生み、外から人を引き寄せる力となっている。すでに30年以上積み重ねられてきたこうした取り組みを学ぼうと、欧米からも多数の人々が視察に訪れている（藻谷他2013: 42-63, 103-106）。「英語」とは基本的に関わりのない、こうした形の「グローバル化」は本当に面白いし、大きな意義があると私は思う。「英語ができなくても国際化はできる」。

「スーパー『英語』大学でなくスーパー『グローバル』大学」という図内の言葉の下にある「英語力要件を課さない派遣プログラム」の開発は、こうした問題意識の下で提起されたアイデアである。英語力の如何を問わず、とにかく学生に海外を体験させよう。立命館アジア太平洋大学（APU）にはFIRST（Freshman Intercultural Study Trip）という1回生向けのプログラムがある。春には国内学生（日本人学生）を韓国等に、秋には国際学生（留学生）を日本国内のどこかに3泊4日の日程で派遣する⁵⁾。学生は少人数のグループに分かれ、現地に到着後、くじ引きで決まるそれぞれの目的地をめざし、アンケートなど調査活動を行いながら移動する。こうした企画を立命館大学でも実現しようと考えた。

結果としてできあがったのがGlobal Fieldwork Project（GFP）と名づけた短期プログラムで、今年度（2017年度）からスタートする⁶⁾。夏期休暇中の短期間（5日ほど）、ベトナム・ホーチミン市とマレーシア・ペナン市にそれぞれ30名ずつ学生を派遣する。前期中に行われる事前研修で学生はグループに分かれ、現地で実施するフィールドワークのテーマ設定、予備調査を行う。幸運にも、このプログラムを支援して下さる現地の大学が見つかり、先方の学生がパディとして各グループのフィールドワークに付き添ってくれることになった。また、立命館大学の校友会がこの企画に強い関心を示し、プログラムに参加する学生に対して校友会から特別の奨学金が支給されることになった。

上に記したように、当初は「とにかく海外を経験させる」ことを主眼にしていたのだが、グループ別のフィールドワーク（簡単なものではあるが）を実施するという、思いのほか内容の濃いプログラムになった。ただし、このプログラムはいわば留学入門編であり、これへの参加をきっかけに、今後さらに長期の留学にステップアップしてもらうことをわれわれは期待している。もっとも、そう書きつつも私自身は、誰もがそうなる必要はないだろうとも思っている。上に述べたように、「超えるべきBorderに貴賤はない」。このプログラムで刺激を受けた学生が、国内のどこかの地域に出て行って何かしてもいい。キャンパスの中にも、Borderを超えてできることはいろいろあるだろう。そして、勉学への関心の眼が開かれるきっかけをこのプログラムを通じて学生が得ることがあれば、これもBorderを超える行為であり、学問に携わる身にとって、それはやはり大きな喜びである。

GFPに結実する構想を考え始めた当初、私たちは、原則として1回生全員が参加するようなプログラムをつくらうと考えていた。その思いを捨てたわけではないが、とりあえずは計60人

でのスタートとなった。幸い、初年度である今年度は両派遣先とも2～3倍の応募があった。今年度の様子を見ながら、次年度以降参加枠を大きく拡大していきたいと考えている。

5. 「英語版ぴあら」から“Beyond Borders Plaza”へ

「英語ができなきゃ国際化しちゃいけないのか」という発想は、「派遣」トライアングルの右上の円内に記された“Beyond Borders Plaza/Square”の名称に関わっても表れている（“Square”の語はその後の検討の中で消えた）。

“Beyond Borders Plaza”（BBP）というのは、日本人学生と留学生との交流を主眼とするキャンパス内の施設だが、トライアングル図の私の最初の案では、「英語版ぴあら」という名称をこれにあてていた。「ぴあら」というのは、本学の図書館内におかれたいわゆるラーニング・コモンズであり、“Peer Learning Room”から作られた造語である。「英語版ぴあら」という名称は、このラーニング・コモンズでの学生同士の議論・交流を、英語（外国語）を媒体とする国際交流に拡張しようという発想によるものだった。しかし、それはおかしい、という違和感が、トライアングル図にこの名を書き込んだ当初から私自身の内にあった。

自分自身の経験を振り返れば、もうずっと以前、初めてドイツに留学したとき、ドイツ語で現地の学生と交流するのは当然であり、実際それはドイツ語を学ぶ格好の機会だった。ドイツ人とだけではない。世界のさまざまな国から来た学生たちとの会話も、当然ながらドイツ語によっていた。それならば、日本（立命館大学）で学ぶ留学生はどうだろう。彼らと日本人が日本語で交流することができれば、それは彼らにとって好ましいことではあるまいか。「英語版ぴあら」という名称には、日本人学生の英語力引き上げのために留学生を利用するという「打算」が透けて見える。しかも、立命館で学ぶ留学生の大半は中国人と韓国人である。「英語版」という名称には、欧米圏からの留学生を念頭においた偏った見方がこれまた透けて見える。

誤解を避けるために一言しておけば、英語力の強化という課題を私が軽視しているわけではない。これについてはすでに述べておいた。また、BBPには、正課外の英語（外国語）学習を支援するスペース（SALSA）が組み込まれることになっている。言語教育センター・言語教育企画課を中心に、日本人学生と留学生との1対1の言語学習パートナー探しを支援するプログラムが数年前から実施されており、これは、BBPで期待される交流活動をいわば先取りするものである。ちなみに、BBPの原案づくりは、言語教育企画課（教学部）と国際部、さらに学生部という関連諸部課の教職員が一緒に議論して進めた。立命館は部課間の壁が比較的低い大学と自認しているが、それでも、部課の壁を越えて自由に意見を出しあったBBPづくりのための議論は、それに参加した職員にとっても新鮮だったようである。BBPは、その構想づくりの段階から“Beyond Borders”だったのである。

BBPにおける学生交流の話に戻ろう。すでに述べたように、留学生と日本人学生の交流の場というのがBBPの基本的位置づけである。さらに、上にふれた語学の正課外学習の他、留学に関する種々の情報提供の場として機能することも期待されている。そうしたものが、2018年度から本学の三つのキャンパスすべてに開設される予定である（大阪いばらきキャンパスは2017年度から先行実施）。しかし、それだけでいいのだろうか。すでに述べたように、超えるべき

Borders は国境に限らず、「Border に貴賤はない」。だとすれば、たとえば国内の諸地域に向かいに行くボランティア活動が BBP の機能に入ってよいのではないか。現状では日本人学生が担い手の圧倒的部分を占めるボランティア活動に留学生が加わるようになれば、それは留学生にとってかけがえのない経験になるだろう。留学生と日本人学生というように国籍による区別を前提とし、両者の交流をいわば特権化して BBP の中心機能とするのは不十分である。BBP が留学生同士、日本人同士の交流の場となっても一向に構わないではないか。キャンパス周辺（に限らなくてもいいが）の地域の方々が加わればもっといい。

BBP の構想づくりの議論のなかで出されたこうしたアイディアは、BBP の具体的設計に議論が移るなかで、残念ながら後景に退いていった。何でもありでは BBP の性格が曖昧になる恐れがあるのも確かだから、こうした「純化」には十分理由があるとは思いますが、しかし、上に記したような発想を消え去らせてはならない。BBP が「国際交流」にとどまらない活動の場になったとき、それは初めて、他大学とは異なる立命独自の施設となるだろう。

6. 「外部評価」と SGU 中間評価

2015 年 6 月に作成した上のトライアングル図は、国際化推進のための全学的会議体であるグローバル・イニシアティブ推進本部会議（本部長は学長。学部長・部次長など、大学の中核メンバーによって構成される）に提出し、ここでいわば全学のお墨付きを得た。その上で、同年の夏期休暇中に、ほぼすべての学部・研究科の執行部を国際部の部長（つまり私）ないし副部長と職員と一緒に訪ね、国際化の取り組みについての懇談を行った。事前に思っていたより学部・研究科は国際化推進に真剣にとりくんでいる（あるいは取り組もうとしている）、というのが、懇談を通じて得た私の感想である。これなら行けるかもしれない。

後期に入り、学生の海外派遣増・留学生増の二つの課題を中心に、取り組むべき課題をあらためてブレークダウンして明確化し、それぞれにタスクフォース（国際部を中心とする教職員から成る少人数のチーム）を設定する「学生海外派遣・国際学生獲得増のための行動計画」を策定した。さらに 11 月下旬には、国際化推進のためのプレスト・ミーティングを大阪いばらきキャンパスで、午後の数時間をかけて実施した。このミーティングには、国際部の他、教務課、言語教育企画課、学生オフィス、総合企画部などの教職員あわせて 25 人が参加した。議論はなごやか、かつきわめて活発で、部課の壁を越えた、まさに Beyond Borders なミーティングだった。

このような議論、そしてタスクフォースによる検討のなかから、たとえば先にふれた Global Fieldwork Project が生まれた。BBP の構想も、こうした議論・検討の産物である。国際部を中心とする取り組みの成果として、たとえば、主として夏期・冬期休暇中に海外から学生を受け入れて実施する短期プログラム（RSJP/RWJP: Ritsumeikan Summer/Winter Japanese Program）では、さまざまな工夫を重ね、受け入れ学生数の大幅増に成功した（2015 年度 = 350 名 → 2016 年度 = 574 名）。他にも、学生向け留学案内パンフレットの改訂、新規交換留学先の開拓、新規海外派遣プログラムの開発など、国際部を中心とする多くの教職員が、実に意欲的にそれぞれの「タスク」に取り組んだ。

もとより、こうした取り組みは、国際化推進に向けた全学の取り組みの一部でしかない。教学

部が主導した英語教育改革の議論については先にふれた。同じく教学部が主導した学年暦改革をめぐる議論では、クォーター制の導入——諸外国の大学との開講時期のズレが学生の海外派遣・留学生受け入れの大きなバリアとなっており、クォーター制への移行によりこの問題に対処することが企図された——も検討課題とされてはいたものの、結局踏み込んだ議論には至らぬままになっている。さらに、国際関係学部におけるアメリカン大学とのジョイント・ディグリー・プログラム（国際連携学科）、オーストラリア国立大学とのデュアル・ディグリー・プログラム（グローバル教養学部）の開設は、本学の国際化の最先鋒を成すものであり、こちらは実現に向けて急ピッチの作業が進められている。

すでに述べたように、これらを含め、本学の国際化推進に関わるすべての取り組みを俯瞰する作業は本稿の課題からはずしている。ただ、SGU 事業の中間評価に関わって実施した外部評価、そして中間評価のための報告書（中間評価調査）にのみ最後にふれておきたい。

2014 年度にスタートした SGU 事業では、3 年ごとに日本学術振興会による中間評価が実施される。2017 年度の第 1 回目の中間評価に備え、その前年に、本学の国際化の取り組みに関する外部評価を実施した。評価委員は学外の有識者 4 人（実業界から 2 名、他大学教員 2 名）にお願いした。評価の素材として作成した報告書（「立命館大学グローバル・イニシアティブ自己点検報告書」）は 160 ページ近い分厚なもので、その内容にここで立ち入ることはできない。評価委員からいただいた多岐にわたるコメントの詳細に立ち入ることも控えておく。ただ一点、本学の取り組み全体に対するつぎのようなコメントにはふれておきたい。「大学全体と学部・研究科単位におけるゴールとビジョンの共有が見えづらい」。2016 年 10 月初め、4 人の評価委員の来訪を得て実施した評価会議の締めくくりになされた吉田美喜夫本学学長の言葉を借りれば、「本気度が見えない」という厳しい評価である。

グローバル・イニシアティブ推進本部をはじめ、本学の各部署がそれぞれに真摯な議論と取り組みを進めていることは評価委員の方々にもご理解いただいたと思う。実際、評価は全体としては好意的なものであった。にもかかわらず、大学全体がいわば一丸となって動いているかと問われれば、そうは言えない、とやはり認めざるをえない。

そもそも本学の SGU 構想調書の内容を、教職員のうちのどれほどが、概要だけでも認識しているだろうか。この種の事業へのアプライにおいてはしばしば見られることであるが、SGU の場合も、公募から申請締め切りまでの短い時間のうちに、限られた数の教職員によって構想調書をまとめねばならなかった。申請を通すために、実現の見通しが不確かと言わざるをえない提案もあえて行っている。そうしたこともあり、本学の SGU 構想に批判的な教職員が少なくないことも確かである。無関心層（ないしほぼ無関心層）となれば、2,500 人近くにおよぶ教職員（とくに教員）のかなりの部分を占めるのではないか。学生については言わずもがなである。

外部評価のために作成した上の「自己点検報告書」にしても、担当部課（職員）から送られてきた関連項目の原稿の少なからぬ部分は内容が不十分で、書き直しを求めねばならなかった。文章による報告に加え、学部・研究科および諸部課それぞれの取り組みを示すために、「全学の国際化の取組と課題（SGU 目標との関連性）」という一覧表を作成したが、それも、今となっては厳しさに欠けていたように思う。この一覧表は、SGU 事業の所定の目標として掲げられている 40 の項目（外国人留学生の割合、日本人学生の留学経験者数、外国語による授業科目数など）

を横軸、各学部・研究科および諸部課による国際化推進のための主要な取り組みを縦軸に列挙したマトリクスで、これらの取り組みのそれぞれが上の40の項目に関連すると思われる場合、縦横の交差する該当欄に○（とくに関連が深いものには●）をつけたものである。縦の項目の記載ならびに○つけは、学部・研究科等の判断に任せた。残念ながら、項目のあげかた、○のつけ方が学部・研究科および部課によってばらばらで、結果として、全学の取り組みの真剣度が伝わりにくいものになってしまったように思う。こうなった理由の一つは、私を含む事務局の指示に厳密さ・厳格さが不足していたことにあるが、○をつける側の真剣度にも——ひとしなみに言うことは避けねばならないが——問題があったように思う。

「大学全体と学部・研究科単位におけるゴールとビジョンの共有が見えづらい」という外部評価委員のコメントは、だから私自身のものであり、実はそうしたコメントを得ることを私は外部評価から期待してもいた。国際化推進に向けた全学の取り組みを高めるためのいわば踏切板になれば、と。

2017年のゴールデンウィーク前から取り組んだSGU中間評価調書の作成には、かなりの時間と労力を注ぎ込んだ。外部評価の際の「自己点検報告書」作成に際して経験した問題を、今回はくりかえさぬよう心がけた。各部課にそれぞれの担当項目についての報告原案作成を依頼した際、たとえば実現時期ないし実現までのプロセスが明確でない限り、「検討する」という表記は避けるよう指示した。できないことを何となくごまかして書き込むような「美化」は避けてほしいという趣旨である。送られてきた原稿には私がすべて目を通し、分からない部分、分かりにくい部分は執筆者等に確認しつつ、かなりの書き直しを行った。結果として、先の「自己点検報告書」と比べ、本学の国際化推進に向けての取り組みの内容を——問題点・課題も含め——より正確に映し出す報告書ができあがったと思う。

中間評価調書それ自体とは別に、各学部・研究科の取り組みをまとめた報告書を、参考資料として別途作成した。書式を統一し、それに従った記載を各学部・研究科に求めた。記載項目としてあげたのは、1. 学生の海外派遣、2. 留学生の受け入れおよび学習支援策、3. 外国語能力の向上、4. 過去5年程度の間実施したその他の特筆すべき取り組み、そして、5. 国際化推進に向けての中期的展望、の五つで、1～3については、「2016年度の取り組み」と「2017年度の計画」をそれぞれ記すよう求めた。また、記載の仕方は箇条書きとし、全体の分量は4ページ以内に抑え、外部の方にも分かりやすい表記を心がけるよう求めた。先のSGU中間評価調書同様、「検討する」という表記は極力避け、また、記載すべき特段の内容がない場合は「特になし」と書くなど、こまかい指示を行った。

この時期、各学部・研究科に対して種々の報告書等の提出要請が重なっており、執行部にさらに負担をかけるのがはばかれる状況だったが、にもかかわらず——精粗の差はやはりあるもの——おおむねきちんとした回答が送られてきた。それに目を通し、いくつもの質問や書き直しの要求を添えて送り返し、修正を加えて再度送られてきた回答を報告書にまとめた。

前に進むには、まず現状の認識を確かなものにせねばならない。SGU中間評価調書と各学部・研究科の取り組みに関する上の報告書により、現状を知るための、かなりすぐれた基礎資料が得られたように思う。では、それをどう活かして前に進むのか。

SGU中間評価調書の一節に私は、「国際化の推進が全学をあげての大きなうねりとなるレベル

には至っていない」と記した。教職員だけでほぼ2,500人を数えるこの巨大な組織の全体が一丸となって国際化の推進に取り組む、というのは正直なところ無理だろう。しかし、「動いてるじゃないか」と2,500人のすべて（35,000人の学生も加えておこう）が実感できるレベルまで取り組みを高めることであれば、なんとかできるかもしれない。そのための試行錯誤がこの先に待ち構えている。

おわりに：「300年後に戦争のない世界をつくる」

SGUの構想調書作成に関わったある職員が、そこに示した諸目標の実現を通じて「大学の顔」を変えようと考えたのだ、と話していた。実際、国際化の推進は、それ自体としては目的になりえない。むしろ、それを通じて大学教育の全体を変える可能性を追求することが課題なのだと思う。しかし、何のために「大学教育の全体を変える」必要があるのか。日本の高等教育が多くの問題を抱えている、という昨今の指摘には私自身も実感として同意しうる。しかし、その問題が、グローバル化した世界に対応して活躍できる「グローバル人材」の育成ができていない、というような内容であるなら、そしてそれが、かつての「企業戦士」のグローバル版を作るという意味になりかねないとすれば、少なくとも私自身は、そうした問題の解決に力を注ごうという熱意をあまり強くはかきたてられない。先にもふれた緒方貞子氏が、「そもそも、グローバル人材という言葉が氾濫している昨今の風潮自体がおかしいのです」（野林・納家 2015: 301）と語っているその言葉を、私はまっとうだと思う。

それでは何のために国際化を進めるのか。何のために「大学の顔」を変えるのか。“Beyond Borders”という言葉に「人と人、人と自然が調和的につながる未来」をつくるという思いがあることはすでに記しておいた。もう一つ、別の言葉を紹介して本稿を閉じることにしたい。私が国際部長に着任した当時の国際課の課長が言った言葉である。「300年後に戦争のない世界をつくる。そのためなら苦労してもいい」。きれいごとではない。今の世界を思えば、きわめて切迫した課題だと思う。「300年後に戦争のない世界をつくる」。それにつながることであれば、国際化の推進には意味があると思う。

註

- 1) 「グローバル化」は、人・モノ・カネ・情報が、歴史上かつてない規模とスピードで国境を越えて移動するという現実に行進する事態を表す概念であり、大学が主体的に進めるのは「グローバル化」でなく「国際化」である、という太田浩氏の理解に従い、本稿では「国際化」という言葉を用いて本学の取り組みについて語ることにする（太田 2011: 1）。実際、ウェブで検索すると、諸外国の大学の同様の取り組みには、通常“internationalization”の語が用いられているようである。
- 2) 本稿は2017年8月に脱稿したものであり、以下の内容はこの時点に即した記述となっている。
- 3) 本稿で除外した部分を含む「全体像」について、さしあたり、SGU中間評価調書の「概要」部分を本稿の末尾に参考資料としてあげておく。
- 4) この程度の定義以上に「アジア・リテラシー概念の探求」をするのは無益だと私自身は思っている。
- 5) 「国内学生」には日本国籍をもたない学生も含まれており、したがって「日本人学生」より「国内学生（domestic student）」——そしてそれに対応する「国際学生（international student）」——の語を使う

のが正確と思うが、本稿では簡便のため「日本人学生」「留学生」の語を用いておく。

- 6) プログラムの策定から実施すべてにわたり、国際部副部長・山中司准教授のイニシアティブによるところが大きい。感謝の意を込めてここにお名前を記しておく。

参照文献

阿部謹也『自分のなかに歴史をよむ』筑摩書房、1988年。

太田浩「大学国際化の動向及び日本の現状と課題：東アジアとの比較から」『メディア教育研究』第8巻第1号、2011年、1-12頁。

野林健・納家政嗣編『聞き書き 緒方貞子回顧録』岩波書店、2015年。

藻谷浩介・NHK 広島取材班『里山資本主義——日本経済は「安心の原理」で動く』角川書店、2013年。

参考資料（註3）：SGU 中間評価調書（抜粋）

【公表】

進捗状況の概要【1ページ】	
<p>平成 23（2011）年に策定した立命館学園の中期計画「未来をつくる R2020」は、学園の将来ビジョンの核を成すモットーとして“Creating a Future Beyond Borders”の語を掲げた。さらに、上記計画の後半期（2016～2020 年度）計画では、「グローバル・イニシアティブの推進」を、取り組むべき主要諸課題の全体を貫く軸と位置づけた。立命館大学における SGU 事業はその最も重要な部分を成す。構想調書で掲げた諸目標の達成に向けたこれまでの取り組みの概要は下記の通りである。</p>	
<p>1. 全学的な推進体制の整備及び事業の自立化に向けた予算措置</p> <p>○平成 26（2014）年 10 月に、学長（総長）を本部長とし、理事長を含む法人役員、全学部の学部長ならびに諸部局の部次長など、大学の中枢メンバーすべてから成る「立命館大学グローバル・イニシアティブ推進本部」を設置した。これまでに 10 回の推進本部会議を開催し、さらに幹事会での議論、そして SGU 担当事務局の日常的な業務を支柱として、SGU 構想調書で掲げた諸目標の達成に向けた取り組みを進めてきた。</p> <p>○学外の有識者 4 人から成るグローバル・イニシアティブ外部評価委員会を立ち上げ、平成 28（2016）年 10 月に評価を受けた。SGU 中間評価にあわせて、平成 29（2017）年に再度、外部評価を受ける。</p> <p>○上記「R2020」の後半期計画において、グローバル・イニシアティブ推進のための政策予算枠の措置を決定した。</p>	
<p>2. 海外諸大学との共同・連携による学士課程設置構想の具体化</p> <p>①大連理工大学－立命館大学国際情報ソフトウェア学部：両大学の共同運営学部</p> <p>②国際関係学部国際連携学科：アメリカン大学との共同学位（ジョイント・ディグリー）プログラム</p> <p>③食マネジメント学部：イタリア食科学大学やル・コルドン・ブルーと連携する「食」の総合学部</p> <p>④グローバル教養学部：オーストラリア国立大学との共同学士課程（ダブル・ディグリー）プログラム</p>	
<p>3. 国際連携の上に立つアクティブ・ラーニングの実践</p> <p>①キャンパス・アジア・プログラム：日中韓 3 大学の共同プログラム。</p> <p>②AIMS プログラム（国際 PBL によるイノベーション育成）：インドネシア 3 大学、タイ 3 大学との共同事業</p> <p>③RISE 1=J Project（産学国際協働 PBL による南アジアの異文化・多様性社会の中で活躍できる高度理工系人材の育成）：インド工科大学ハイデラバード校等との共同事業</p> <p>④EDGE+R（イノベーション・アーキテクト養成プログラム）：グローバル・アントレプレナー育成をめざす文理融合型プログラム。</p> <p>⑤「みらい塾」：グローバル IT 人材育成リーディングプログラム。</p> <p>⑥Asian Community Leadership Program：日韓台 3 大学の共同プログラム。</p>	
<p>4. 立命館大学アジア・日本研究所の設置</p> <p>○アジア研究・日本研究の拠点として、標記研究所を平成 27（2015）年 12 月に設置した。</p>	
<p>5. 新規の海外拠点（中国、ベトナム）の開設、国際協力事業を通じた新たな展開</p> <p>○カナダ、英国、インドに加え、中国・北京、ベトナム・ハノイに海外事務所を開設。平成 29（2017）年中に事務所を整備し、職員を派遣する。</p> <p>○エジプト日本科学技術大学（E-JUST）の事務業務支援の受託決定に伴い、エジプトへの職員常駐を決定。</p>	
<p>6. SGU 目標の進捗（平成 25 年度⇒平成 28 年度）</p> <p>○外国人留学生の受入（通年） 【H25】 2,242 人 ⇒ 【H28】 3,297 人（147%）</p> <p>○協定に基づく派遣日本人学生数（通年） 【H25】 1,244 人 ⇒ 【H28】 1,856 人（149%）</p> <p>○外国語による授業科目数（通年） 【H25】 580 科目 ⇒ 【H28】 855 科目（147%）</p> <p>○外国語のみで卒業できるコース在籍者数 【H25】 342 人 ⇒ 【H28】 537 人（157%）</p> <p>○学生の語学レベル（CEFR B1/学部生） 【H25】 7,607 人 ⇒ 【H28】 8,178 人（108%）</p>	

“Beyond Borders” and the Internationalization of Higher-Education at Ritsumeikan University

YAMAI Toshiaki (Professor, Executive Direktor, Division of International Affairs, Ritsumeikan University)

Abstract

In 2009 the Ritsumeikan Academy drew up its future vision “R2020” and adopted “Creating a Future Beyond Borders” as the motto of the vision. This motto shows the Academy’s will to contribute to establishing a future in which people, as well as people and nature, harmoniously coexist. The efforts of Ritsumeikan University to promote the internationalization of its education and research activities have been carried out in the spirit of this “Beyond Borders”. In this paper I present and examine some of these efforts related to the Japanese government’s “Top Global University Project”, especially after my arrival as executive director of the division of international affairs in 2015: A trial-and-error process for enhancing the internationalization of education with some positive outcomes and many unresolved problems.

Keywords

Beyond Borders, SGU (Top Global University Project), reform of English education, study abroad programs, Beyond Borders Plaza